

# 埼玉県秩父市贅川猪狩神社の狼信仰に関する一考察

\* 西村 敏也

## はじめに

狼信仰寺社とは、狼を信仰の対象と位置づけ、狼に関する言説を自己の信仰・思想・哲学の中に取り入れている寺社のことである。これらの寺社の特徴として、狼の護符の頒布・狼像の奉納・狼信仰に関する由緒・その寺社にまつわる狼の伝承などの存在が挙げられる<sup>1</sup>。日本各地には、このような狼信仰寺社が数多く存在しているが<sup>2</sup>、埼玉県秩父地方の狼信仰寺社の多さと、その信仰の盛んさは、際だっている<sup>3</sup>。本稿で対象とする秩父市贅川古池地区の鎮守である猪狩神社も、狼の護符を御眷属と称して頒布している神社であり、毎年四月の第三日曜日の春祭りには狼の護符を求めて多くの崇拜者が登拝してくる。また、毎年十一月の第三日曜日には奥の院の祭りとして、氏子たちが、猪狩山へ登拝をおこない、狼への奉斎の神事をおこなっている<sup>4</sup>。

本稿は、ここ猪狩神社の狼信仰の様子を、描き出すことを課題とする。すなわち狼信仰に関わる儀礼、そしてそれを支える言説や伝承を通して、猪狩神社をめぐる狼信仰の総体を捉えるものである。また、

秩父地方の狼信仰寺社に関しては、事例報告も少しずつではあるが蓄積されてきており<sup>5</sup>。本稿には、これら秩父の狼信仰寺社の事例報告の役割も課したいと考えている。

## 一 猪狩神社と狼信仰

猪狩神社は、埼玉県秩父市荒川贅川の猪狩山（標高八二五<sup>6</sup>）に鎮座する神社であり、山頂には奥社、猪狩山の麓の字東樽に本社が鎮座している。明治三十年（一八九七）の「神社明細 写」<sup>6</sup>によれば、ヤマトタケルは、景行天皇四十二年の東征の折り、三峰山を経て猪狩山に登り、伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱を祀ったとされ、この事蹟が神社の起源とされている。また、「神社明細 写」には、正治二年（一一〇〇）社殿再建の折りに日本武尊を合祀、その後寛政五年（二七九三）にも再建がなされたことが記されている。前近代の状況を窺い知る史料として『新編武蔵風土記稿』があるが、猪狩神社に関する記述は、次の通りとなっている。

（史料一）

\* Toshiya NISHIMURA 日本伝統文化学科 (Department of Japanese Tradition and Culture) 非常勤講師

猪狩嶽

二村の乾にあり、小名古池と云る巽の方なる麓より、崩岩の山径を踏み、又は岩盤と曲径を登ること廿五町を経て、頂に至れば僅の平地ありて、猪狩明神の小祠を安ず、社頭には榎・松・桧などの生茂れり、此山は村持なれども、松洗院に託して別当のごとくせり、明神の眷属とて犬あり、此犬を乞ひ借り、狐つき或は猪鹿の防をなすに応驗ありとて、此隣の村郷祈誓して参詣するもの多し、犬を借りると云には、松洗院に就て賽銭を納め、護符札を得て帰るとぞ、或説に意玄入道監澤落去の時、石上の切所にて深井対馬守相ささへ、其間に意玄は落去り、深井は深手を負ひ、此山に登りて生害し、今に神祠に武器少しく存せりと聞けば、寺僧或里老等に其事跡を尋るに、左ある事は伝へもなく、知るものなし、神祠には只白幣のみ存せり、

頂きに猪狩明神の小祠を安ず、とあることから当初は山頂に本社があったと考えられる。そして、松洗院（曹洞宗）が別当寺のような存在であったことが分かる。ちなみに、松洗院は山号が猪狩山で、秩父郡下小鹿野村鳳林寺末、本尊は薬師であり、開山は天正十五年（一五八七）とされている。さて、同史料から、猪狩明神の眷属として狼が位置付けられ、近世より狼の信仰が盛んであり、護符の頒布がなされていたことが分かる。その御利益は、憑きもの落とし（狐つき）や害獣除け（猪鹿）であった。人々の護符入手の方法は、松洗院に賽銭を奉納し、同寺で請けるといふものであった。

さて、現在の猪狩神社の祭神は、伊弉冉尊・伊弉冉尊・日本武尊である。境内末社として、熊野神社・稲荷神社・諏訪神社・秋葉神社・菅原神社が祀られている。本社へ至る石段下には、一對の狼像が奉納

されている。奥社には、伊弉諾尊・伊弉冉尊の他、山祇神社が祀られている。祭礼は、元旦祭（一月一日）・春祭り（四月十五日）・夏祭り（七月二十日）・奥の院祭り（十一月十八日）である。祭礼には、昔から二人の神職に来てもらっている。一人は、三峰神社の神職、一人は猪鼻熊野神社の神職である。ちなみに、現在は、元旦祭以外は、各第三日曜日に挙行されている。また、氏子区域は、贄川の古池地区で、氏子十三軒である（現在は十一軒）。神社総代は、総代五軒でその内、二軒が責任総代である。また、行事が二軒であるが、これは持ち回りで担い、祭礼を取り仕切る役職である。

祭礼の内、特に春と奥の院祭りは、神社の起源に関わる猪狩山にまつわる重要な祭例と位置付けられている。先に示した、明治三十年の「明細帳 写」には、奥社の項目に春と秋に猪狩山に登山して、祭礼をおこなっていたことが記されている。それは、次の通りである。

（史料2）

新編武蔵風土記稿ニ猪狩嶽トアル処ニシテ本社トハ殊ニ深キ因縁モ之有、年々春三月十五日ハ村内人民一同登山シ天下泰平五穀豊穰ヲ祈リ秋九月十九日ニハ人民家毎ニ其年ノ新作ナル五穀（神酒及粟ノ蒸飯等）ヲ携ヘ祭官ト俱ニ登山シ神前ニ献リ是ヲ撒シ以テ当日ノ宴会ヲナス旧例ナリ

春は祈念祭、秋は収穫祭の色合いが強いことが分かる。次節以降では、この二つの祭礼を眺めつつ、猪狩神社の狼信仰について考えてみたい。

## 1 猪狩講と春祭り

(史料2)の通り、春祭りは、明治時代には三月十五日におこなわれていたが、後に、毎年四月十五日に、おこなわれるようになった(現在は四月第三日曜日)。聞き取り調査によれば<sup>10</sup>、現在は、猪狩山には登拜せず、本社に猪狩講の講員が登拜して「お犬替え」という御眷属請けをおこなう。御眷属の御利益は、火防・盗賊除などと云われている。猪狩神社の狼は、三峰山の子分のような存在であるという考え方も存在している<sup>11</sup>。

講は、「講中」「永代講」の二種類がある。「講中」は、旧荒川村を中心とした秩父地方に多く分布している講であり、「永代講」は、越生町・小川町・飯能市・蕨市など埼玉県全体に分布している講である。「永代講」は、講員の数も多く、代参二名が登拜するが、現在は、バスなどを利用して大人数で訪れるようになった。ちなみに、越生の講は、近代になり神職が布教した結果、結成された講であると云われている。蕨の講は、一旦廃絶したが近年復活した講である。戦後の最盛期には、三百ほどの講があったが、現在は百八十ほどに減少してきているという。最盛期は六百枚ほどの護符を刷っていたが、現在は二百枚ほどになっている。ちなみに、護符は、三月中に古池の氏子たちが公民館に集まり、一枚ずつ手作業で古い版木を使って刷っている。

講の形態としては、「一人講」「五人講」の二種類がある。「一人講」は、一人で一つの講を形成しているもので、御眷属を一人につき一体請ける。「五人講」は、五人で一つの講を形成し、五人で一体の御眷属を請けるものである。「五人講」は、五人を超えても構わず、人数が増えたものが「永代講」のような大人数を抱えた講になっている。春祭りは、午前十時より祭典が本社で挙行される。登拜した講員は、

社務所で受け付けをおこない、拝殿へ昇り、御祈禱が済むと本社隣の旧松洗院跡地にある控所で、お茶などの接待を受けつつ待機し、御眷属を請ける。その後、公民館へ移動して直会をして帰山する。現在は、接待は大人のみで対応しているが、昔は、小学四年生以上の男子が、祭礼の給仕をおこなった。小学校も公認で休むことができたという<sup>12</sup>。

## 2 奥の院の祭り

(史料2)によれば、当時の奥の院の祭りは、九月十九日であった。その後、月遅れの十月二十日、さらに十一月十八日となり、現在は十一月第三日曜日と祭日に変化してきている。この祭例は、同史料中に「五穀豊穰を祈り」とあるように、収穫祭としての意味合いが強いと指摘できるが、当初はクンチに祭礼をおこなっていた。秩父地方では、クンチに山の神を祀る地域が多く、ここ猪狩神社の奥の院祭りも山の神奉斎の意味が存在していたことが想像出来る<sup>13</sup>。また、現在では、同時にヤマトタケルの故事に倣う神事としての認識も持たれている。

二〇〇九年、筆者は、奥の院の祭りに参加する機会を得たので、その様子を記したい。まず、祭礼当日八時に、氏子たちがお宮のまわりの清掃を開始する。十時、本社で神職二名が祝詞奏上をおこない、区長が氏子を代表して玉串奉奠をおこなう。その後、本社脇の参道入り口から猪狩山をめざして、十人程度で登山を開始。一人は、神を背負って登るが、この神には神が依り付いていると考えられている。その他の人は、箒を持ち道普請をしながら進む。鶴嘴を持って道普請をおこなう人もいる。二〇〇三〇年ぐらい前は、当日、先発隊四・五人が道普請のために登り、下山後、風呂に入り清めてから、再度登山した。

現在は、区長が数日前に簡単な道普請のために登る程度となっている。また、昔は、女人禁制であったが、現在は女性も登ることが可能となっている。十一時頃、山頂に到着。山頂の掃除をおこない、垂紙を差し込んだ、しめ縄で境界を結ぶ。その後、穴を掘り、その中で、まわりに落ちていた木と一緒に山頂の祠に納められていた古い護符をお焚上げする。奥社と山祇神社の祠に紙垂を差し込み、しめ縄を設置する。その後、祠に神酒・塩・ニンジン（大根・小カブでも良いとされている）・サンマを供える。ちなみに、昔は、箸はその場にあった木で作ったものだったが<sup>14</sup>、現在は割り箸をめいめいが持参している。その間に、神職は着替えて神事の準備を進める。すべての準備が終了すると、総代の一人が「おざしきができました。お供えを一つ」と声をかける。めいめいが、祠の前に敷かれた木の葉の上に、各家庭で炊いて、弁当箱へ詰めてきた赤飯を、一人ずつ少量供えていく。ちなみに、昔は、稗粟などの雑穀や粟を持参したが、今はなくなった。その後祭典が開始される。祝詞奏上、一人一人が玉串奉奠をおこなう。その後、直会に移行する。神酒で乾杯後、穴を掘った中で、サンマを焼く。焼いたサンマと、持参したおかず、そして赤飯を食べる。頃合いを見計らい、南東の古池地区に向かって「ウオー・ウオー・ウオー」と三回、鬨の声をあげる。その後、下山する。

下山後、氏子たちは一旦自宅に帰り、二時に公民館で改めて直会をおこなうために集まる。昔は、個人の家でおこなっていたという。また、現在公民館でおこなっている直会を、山上でおこなったこともあったという。上座に神職二名が座り、区長の挨拶、続いて保存会会長が乾杯の音頭をとり、会費制で、用意された仕出し弁当・酒・ビール、で直会が開始される。会が終わりに近づくと、五人によるシメがおこな

われる。挨拶で集落の人々の健康・繁盛祈願の言葉が添えられた後、皆で三本締めをおこなう。これを五人おこなう。その後、一人が挨拶をおこない、皆で万歳三唱する。そして最後の人が挨拶をおこない、「ウオー・ウオー・ウオー」と三回、鬨の声を皆であげる。その後散会となる。

さて、奥の院の祭りとは、山の神への奉斎儀礼・収穫祭という要素の他に、オタキアゲとは称さないものの、赤飯を供えるなど、狼への奉斎という形態からして、広義にオタキアゲの神事として位置付けられるものである<sup>15</sup>。そして、これらの要素にヤマトタケルの故事が習合した儀礼と言えよう。

## 二 ヤマトタケルをめぐる由緒と狼信仰

猪狩神社の社伝として記されている、ヤマトタケルをめぐる由緒に關してである。秩父地方で狼の護符を配布している寺社では、そのほとんどでヤマトタケルの英雄譚に因んで、自らの由緒を語っている傾向を見いだすことができる。三峰山や両神山、宝登山では、ヤマトタケルを助けた狼に因んで護符を出すようになったと伝えられているが、この英雄譚は『日本書紀』に記載されたヤマトタケルの東征伝説を、各々の寺社が自らの由緒に取り込み、社伝・縁起に記されたものと考えられる。ここ猪狩神社にもヤマトタケルの英雄譚を含む由緒が伝えられている。

(史料3)

「猪狩神社」

由緒

日本武尊東国平定のみぎり、この地を過ごさせられ、給うたところ、猪鹿の群が御ゆくてをささぎったので、尊は從者等とともに弓矢をとって御狩りを遊ばされた。めでたく御狩りが終わって、尊は山上に祠をたてて伊弉諾、伊弉冉二柱の神をまつり、御平定完遂を御祈り遊ばされた<sup>16</sup>。

(史料4)

一、由緒

旧里 老二伝フ景行天皇四十二年皇子日本武尊東征ノ日、三峯山ヲ經、当山ニ登リ給ヒテ猪鹿ノ群ヲ追退セラレ、以テ伊弉諾・伊弉冉ノ二尊ヲ勸請シ猪狩神社ト称セラル<sup>17</sup>。

(史料3)は、明治元年(一八六八)県提出の神社明細帳写を『秩父郡市神社誌』に収載したものの、(史料4)は、(史料2)の明治三十年に県に提出した「明細書 写」の冒頭部に記された由緒である。神社の起源は、ヤマトタケルが猪鹿の退治をし、猪狩山頂に伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱を祀ったことにあるという。ちなみに(史料4)では、三峰山を経た後と記されている。ヤマトタケルをめぐる由緒は、現在の時点では近代になってから記されたものしか見あたらないが、『新編武蔵風土記稿』に狼信仰が既に存在していたことなどから考えるに、成文化されていたか、もしくは、それに近い形の由緒が近世から存在していたと考えられよう。しかし、古記録類を所有していた松洗院が、宝暦年中(一七五一～一七六三)に火災に遭い、すべてを消失したことに、現在は確認できないのが現状である。

猪狩神社では、神社の裏手に聳える「猪狩山」が奥社と云われ、山

上には奥ノ院が祀られているが、現・猪狩神社は遙拝所であり里宮だったとも云われている。当地には「池の入り」と称される湿地帯もあり、水に困ることのない土地柄だと云われているが、その水をもたらずの「猪狩山」と云われ、水分の神としての山岳への信仰が古くよりあったことが窺える。「猪狩」の語源は、ヤマトタケルが三峰山へ登拝する途中、突如として巨大な猪や鹿が現れて行く手を遮ったため、剣によって討つたことに因むと云われている。当地と少し離れた場所に「猪鼻」という地名があるが、ヤマトタケルによって切られた猪の鼻が落ちたところであるという伝承が存在している。その後、ヤマトタケルは当地に伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱を祀り、「猪狩山」の山上で酒宴をしたと云われている。ちなみに、その時に空いた酒樽を山の東西に転がしたので、その落ちた場所が東樽・西樽という地名の起こりになった、という伝承も存在している<sup>18</sup>。

### 三 地域神話の世界

1 地域に展開する神話  
さて、猪狩神社の周辺でもヤマトタケルの伝説が散見される。例えば「猪鼻」には熊野神社が鎮座している<sup>19</sup>が、熊野神社氏子の小林家には「熊野大神縁起」が遺されている。

(史料5)

景行天皇御宇四十一年日本武尊東夷お平定し給ひ北めぐり経て甲斐の国に入り酒折りの宮より雁坂の山お越し三峯に登り給ひ下山の道すがら何処よりか大なる猪馳来り尊の軍さしるしお牙に懸け走り行きぬ從者大ニ怒り遁すな射とめよと各々矢を放てども一筋だも猪

に立たず尊此有様を御覧んぜられ御躬之矢を射給へば過たず猪の頭に発止と命りければ其の狂ひの様最々物凄山川も震るひ動かす斗り漸くにして大なる岩の間に斃れにければ人々近づき見るに猪にわあらで山賊と覚しき者の頭に其矢命り其の外の小賊共わ彼の巨岩におし倒されて死してけり此の賊等ハ此の岩洞お住家として遠近の民を苦しめし大賊にて郷人等が鬼神の如く懼れし賊なりし尊の彼等を射斃し給ひしと聞きし郷人等わ其徳に感し奉り大ニ喜ひて各々云ひ合わせ濁酒を捧げ奉れば尊彼等郷人の朴直を愛て給ひ暫く此所に憩ひ給ひはからず強賊を射しわは一編に神の護らせ給ふなりと宣ひ此所に伊弉諾伊弉冉命お祀り熊野大神と崇め御矢を納め給ひしと、

其後天平八年国中に疱瘡流行せし時三峯山へ奉幣使として葛城連好久御登山せしとき当社にも祈願をなしたるとて其後わ尊に濁酒を捧げしを因める甘酒まつり疫神流しわ毎年六月廿八日奉仕すと

猪の鼻の地名わ彼賊共お庄し倒したる巨岩の形猪の鼻に似たると猪の猪の尊を導きたるに因ると云々

前に記す縁起ハ永禄十二年武田信玄の軍乱入し宮殿其他放火せられ社殿と共に焼失しのこれるものは尊の腰かけ石と矢の根石□いしの斧なり

後世祭事のたへなん事をうれひて小林氏の霊に依りて記す

享保十五年春三月

源清信(花押)<sup>20</sup>

熊野神社では、毎年七月二十五日に「甘酒祭り」(「甘酒こぼし」とも言う)という神事がおこなわれている<sup>21</sup>が、この祭りの起源を解説するかたちで神社の由緒が記されている。すなわち、ヤマトタケルが当地で猪を退治した。しかし、実はヤマトタケルが退治したのは山賊

であり、仲間の山賊も巨岩に倒され死んでしまった。この巨岩が猪の鼻に似ているので、猪鼻が地名となった。そのお札に里人が濁酒を差し出した。ヤマトタケルは、当地に伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱を祀り、熊野大神と定め、射った矢を奉納した。その後、天平八年(七三六)に当地で疫病が流行したため、この故事に因み濁酒を捧げて疫病流しとしての性格を持つ「甘酒祭り」が始まった。その後武田信玄の焼き討ちにあつたので、ヤマトタケルの痕跡として「腰掛石」のみが遺された。現在、境内には、「腰掛石」が遺されているが、また、ヤマトタケルが禊をしたとされる「禊井戸」も遺されている。猪狩神社の由緒との差異は、ヤマトタケルが退治した猪は、実は当地で村人を悩ませていた山賊であつたということである。

さて、熊野神社には「烏合の樹」と呼ばれる杉の木があるが、この木に群がった烏の鳴き声によって吉凶を占つたとされている。熊野神社の鎮座する「猪鼻」は、三峰山参詣路であるが、紀州熊野の参詣路に似ていると云われ、熊野の九十九王子に猪鼻王子が存在していることから、この地の熊野神社勧請には、三峰山関係の熊野修験が関与していたとも云われている<sup>22</sup>。

また、贄川には、その他、ヤマトタケル由緒の神社として神明社が存在している。由緒には次のようにある。

(史料6)

景行天皇ノ御宇皇子日本武尊東征ノ御時、甲斐国ヨリ武蔵国ニ入り給フノ順路甲斐ノ国境ナル雁坂山ヲ越へ当地ニ出サセ給ヒ国形ヲ視ソナハシテ尊ノ玉ハク此川ノ先キハ日向ナレバ日影差スル所ニ憩ハント、則チ本村熊倉ヶ岳ノ山麓ニ突出セル丘山ニ至リ給ヒシニ該

岳ノ殊ニ優レテ清地ナルヲ深く感賞アラセラレ茲ニ神籬ヲ設ケ伊勢皇大新宮ヲ遙拝アリテ暫ク憩ハセ給フ処ナリ、是以テ爾後村民等其蹟ヲ追慕シ当時ノ記念トシテ該所ニ宮殿ヲ造営シ天照皇大神ヲ鎮祭シ奉ルヲ以テ本社ノ起源ナルトス<sup>23</sup>、

熊倉ヶ岳の麓の伊勢山を、神社の起源とする神社であるが、三峰山を中心とした地域神話に直接的に関連するものではないが、ヤマトタケルの神話を取り込んで神社の由緒が語られているものであり、大局的に見れば、本稿で指摘する地域神話の言説を補完するものと言えよう。今後詳細な分析を加えてみたいと考えている。

さて、繰り返すことになるが、秩父地域には、ヤマトタケルに関する伝説が多く遺されており、地域社会が『日本書紀』の神話を取り込み、地域神話を形成させていた地域と考えられる。神社は、それを自らの由緒の中に取り込み、縁起・社伝として成立させたと考えられるが、以上のように、猪狩神社とその周辺では、三峰山を中心とした、ヤマトタケルにまつわる一つの文脈でつながっている地域神話とでも呼べる伝承を共有していたと言える。細部にわたっては、符合しない点も多々あるものの、大局的に見た場合、一つの世界像を描き出しているものと捉えることが可能であろう。

## 2 由緒をめぐる問題

猪狩神社の由緒とその周辺部で展開する神話をめぐる、注目すべき点を提示しておきたい。

### (史料7)

胆吹山に至るに、山の神、大蛇に化りて道に当れり。爰に日本武

尊、主神の蛇と化れるを知らずして謂はく、「是の大蛇は、必に荒ぶる神の使ならむ。既に主神を殺すこと得てば、其の使者は豈求むるに足らむや」とのたまふ。因りて、蛇を跨えて猶行でます。時に山の神、雲を興して水を零らしむ。然るに霧を凌ぎて強に行く。方に僅に出づること得つ。猶失意せること酔へるが如し。因りて山の下の泉の側に居して、乃ち其の水を飲して醒めぬ。故、其の泉を号けて、居醒泉と曰ふ。日本武尊、是に、初めて、痛身有り<sup>24</sup>。

### (史料8)

伊吹の山の神を取りに幸行でましき。ここに詔りたまひしく、「この山の神は、徒手に直に取りてむ。」とのりたまひて、その山に騰りましし時、白猪山の邊に遭へり。その大きき牛の如くなりき。ここに言挙して詔りたまひしく、「この白猪に化れるは、その神の使者者ぞ。今殺さずとも、還らむ時に殺さむ。」とのりたまひて騰りましき。ここに大水雨を零らして、倭建命を打ち惑はしき。「この白猪に化れるは、その神の使者にあらざて、その神の正身に当たりしを、言挙によりて惑はさえつるなり。」故、還り下りまして、玉倉部の清泉に到りて息ひましし時、御心稍に寤めましき。故、その清泉を号けて、居寤の清泉と謂ふ<sup>25</sup>。

### (史料9)

山の神、王を苦びしめむとして、白き鹿と化りて王の前に立つ。王異びたまひて、一箇蒜を以て白き鹿に弾けつ。則ち眼に中りて殺しつ。爰に王、忽に道を失ひて、出づる所を知らず。時に白き狗、自づからに来て、王を導きまつる状有り。狗に随ひて行でまして、

美濃に出づること得つ<sup>26</sup>。

(史料7)の『日本書紀』で、伊吹山において、荒ぶる山の神であった蛇に傷つけられたヤマトタケルが、その傷がもとで伊勢において亡くなるという記事が見られる。(史料8)の『古事記』では蛇の箇所は猪になっている。ちなみに、猪狩神社の由緒でヤマトタケルが退治した鹿も(史料9)の『日本書紀』では、やはり山の神の化身としてヤマトタケルを苦しめるが、こちらは、白狗の助けもあり退治ができている。他の秩父地方の狼信仰神社のヤマトタケルに関わる由緒が『日本書紀』をなぞるかたちで記されているのに対し、猪狩神社の由緒では『古事記』の記述が利用されていることが指摘できよう。また、他の狼信仰神社で登場するヤマトタケルを引導したとされる狼の直接的な記載がない点も興味深い。

### 3 神話形成の背景―贄川と三峰神社―

贄川は、中世以来、三峰街道の宿場町として栄えた地であった。贄川の地名の由来は、ほとぼしる荒川の流れが煮え立っているように見えたからという説(『秩父志』〈天保八年〜明治二十年〉<sup>27</sup>)や、贄つまり神饌の魚を捕った川であるからという説(『埼玉県秩父郡誌』〈大正十三年〉<sup>28</sup>)などがある。ちなみに、この贄川には、贄川の鎮守として八幡神社が存在しており、古池地区の住民にとって総鎮守とも言える存在となっている。古池地区では、以前は、八幡神社の行事・会合などに二〜三人程度が参加していたが、五年くらい前から参加しなくなった。これは、古池地区の鎮守である猪狩神社に絞って大事にお守りしていった方がいいからという意見が大勢を占めたからだとい

う<sup>29</sup>。

さて、この贄川は、大正時代までは、三峰山参詣にとって重要な役割を果たしていた。

#### (事例)

贄川の宿は、三峰山への登拝路における最後の宿場としても大きい役割を担ってきた。当時、登拝日の決まっていた講社に対して、神社からの使者がこの贄川の宿まで講社の人々を出迎え、道中の労をねぎらった。帰路に当たっても、使者が講社の人々を贄川まで送り、別れの盃を交わし、道中の無事を祈るとともに、翌年の登拝が約束された。こうした贄川の宿を中心とした三峰神社と講社との結びつきが、三峰講を支える大きな柱の一つとなっていたことは言うまでもない<sup>30</sup>。

三峰山へ講中の一員として参詣する者は、三峰山宿坊に宿泊するものが多かったが、贄川に一泊し、早朝約十キロメートルの行程を経て、三峰山へ登り、参詣が終わるとすぐに下山して、夕方には贄川に至り、また、贄川の宿屋で一泊するという参詣者も多かったという。明治時代には、六軒の旅館が存在し講中の宿泊に対応し、その他にも講中が訪れた時のみ宿泊対応をした家もあったという。旅館は、近世以来営業しているものもあった。近世期以来、贄川町分の東入口には、三峰神社の一之鳥居が存在し、三峰山神域の入り口とされていた<sup>31</sup>。

大正初期、贄川から六キロメートル上流の大滝村大輪に一之鳥居が移転した。荒川沿いの道路が開削され、大正六年(一九一七)には秩父鉄道が影森まで開通、大正八年(一九一九)には影森と大滝村強石



間に乗合バスの運行も始まった。昭和十年（一九三五）には、秩父鉄道が三峰山口まで延伸した。昭和十四年（一九三九）には大輪から三峰山山頂までロープウェイが建設された。これにより三峰山参詣者は増加したが、参詣時間の短縮は宿泊の必要を無くし、贄川の三峰山参詣者宿泊地としての役割は終了した<sup>32</sup>。三峰山へのアプローチの仕方が時代の流れの中で変化したものであり、贄川と三峰山との関係は現在は途絶えているものの、大正時代まで、当地は三峰山参詣にとって重要な地であった。このことから、三峰山をめぐる地域神話が発生してしかるべき地域であったと言えよう。

### おわりに

猪狩神社は、近世期に狼の護符が頒布されていたこと、が確認できる狼信仰寺社である。講の分布は、現在は埼玉県内に止まっている。最近では減少傾向にあるものの、それでもなお多くの講員が、春祭りに「お犬替え」のために訪れる。そして、秋には、奥の院の祭りとして、猪狩山へ氏子たちが登拝している。これは、山の神への奉斎儀礼・収穫祭という要素に、広義にオタキアゲの神事に分類できる儀礼、そしてヤマトタケルの故事を再現する儀礼が習合した習俗と言えよう。さて、春祭り・奥の院祭りとも、神職が介在するものの、それを主体的に支えているのは、氏子十一軒であるということが特記すべき点であろう。神社信仰に狼信仰が取り込まれたものの、その担い手の中心は氏子たちであり、神社信仰と民俗信仰の中間にあたる儀礼とも言えよう。さて、このような狼の信仰を支えている言説が、ヤマトタケルをめぐる由緒である。そしてこの言説は、猪狩神社の由緒はもろんであるが、単独で成立しているものではなく、広域に展開する別の場所

の伝承と整合性を以て説かれていることが、特徴的である。特に、三峰山という勢力ある寺社と結びつけ、その神話の世界に位置付けることで、より説得力ある言説となったことであろう。もともと、秩父地方は、ヤマトタケルの伝承が流布していた地域であり、狼信仰の正統性もそれと関連付けて語られる事が多い。三峰山の伝承の中に、自らを絡めて記すことは、よりいっそうの効果を高めたと考えられる。狼の由緒はなくとも、猪鼻熊野神社などは、ヤマトタケルの由緒を以て、三峰山を中心とした神話的世界に自らを位置付け、現在の神事の由緒が語られているのである。しかし、強引に結びつけたのではなく、それには根拠となるべき社会的背景が存在した。古池地区を含む贄川は、大正時代まで実際に三峰山と深い関わりを持つ地域であった。贄川は、参詣者が集い、三峰山の宗教者や役人も行き交う場であった。それが、地域神話を生み出す背景となっていたのである。寺社の由緒は、宗教者を中心となつて記されたことが考えられるが、この地域神話は、宗教者と民衆が一体となつて創られていった可能性があり、また、その神話を支えていったことが考えられるのである。

### 〔註〕

- 1 拙稿「秩父武甲山に関する一考察—狼信仰とヤマトタケルの由緒—」（『武蔵大学総合研究所紀要』一九、二〇一〇年）
- 2 拙稿「狼信仰に関する一試論—狼信仰寺社とその由緒—」（『武蔵大学人文学会雑誌』四一—二、二〇〇九年）
- 3 直良信夫『日本産狼の研究』校倉書房、一九六五年、平岩米吉『狼—その生態と歴史—』池田書店、一九七二年、野本寛一「山犬信仰の発生と展開」（『焼畑民俗文化論』雄山閣、一九八四年）、飯塚好「お犬様信仰とその周辺—秩父地方を中心として—」（『埼玉県立博物館紀要』一五、一九八九年）、神山弘「秩

- 18 「猪狩神社」(埼玉県神社庁神社調査団編「埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父」埼玉県神社庁、一九八六年、一三八四頁)
- 17 前掲「明細書 写」
- 16 『秩父郡市神社誌』埼玉県神社庁秩父郡市支部、一九六五年
- 15 『武蔵大学総合研究所紀要』一八、二〇〇九年
- 14 前掲飯塚好「お犬様信仰とその周辺―秩父地方を中心として―」  
拙稿「武州三峰山と狼信仰―産見舞い・オタキアゲの儀礼の考察を中心に―」
- 13 前掲飯塚好「お犬様信仰とその周辺―秩父地方を中心として―」前掲牧野眞一「山犬信仰の諸相」参照
- 12 二〇〇九年、筆者による、千嶋章市氏への聞き取り調査
- 11 二〇〇九年、筆者による、千嶋章市氏への聞き取り調査
- 10 二〇〇九年、筆者による、千嶋章市氏への聞き取り調査
- 9 松尾翔「秩父地方の狼像」(『あしな』二三八、一九九四年)
- 8 前掲蘆田伊人編「大日本地誌大系十八 新編武蔵風土記稿」第十二巻、三〇二頁
- 7 蘆田伊人編「大日本地誌大系十八 新編武蔵風土記稿」第十二巻、雄山閣、一九九六年、三〇一頁
- 6 「明細書 写」(『加茂下家所蔵文書』)
- 5 拙稿「武州三峰山の歴史民俗学的研究」二〇〇九年、岩田書院、長沢利明・金井塚正道「岩根神社の大口真神信仰―埼玉県秩父郡長湍町井戸―」(『西郊民俗』一九三、二〇〇五年)、前掲拙稿「秩父武甲山に関する一考察―狼信仰とヤマトケルの由緒―」
- 4 宮崎茂夫「猪狩・城峰のお犬様―埼玉県秩父郡―」(『あしな』一九八四年)「猪狩神社」(荒川村歴史民俗研究会編「村のまつり」荒川村教育委員会、一九九二年)
- 3 「猪狩神社」(埼玉県神社庁神社調査団編「埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父」埼玉県神社庁、一九八六年)参照
- 2 拙稿「武州三峰山の歴史民俗学的研究」二〇〇九年、岩田書院、長沢利明・金井塚正道「岩根神社の大口真神信仰―埼玉県秩父郡長湍町井戸―」(『西郊民俗』一九三、二〇〇五年)、前掲拙稿「秩父武甲山に関する一考察―狼信仰とヤマトケルの由緒―」
- 1 蘆田伊人編「大日本地誌大系十八 新編武蔵風土記稿」第十二巻、雄山閣、一九九六年、三〇一頁
- 19 「熊野神社」(前掲「埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父」一三八八頁)
- 20 「熊野大神縁起」(『小林家文書』)
- 21 浅見清一郎「猪鼻の甘酒祭」(『秩父 祭と民間信仰』有峰書店、一九七〇年、一〇五頁) 埼玉県教育委員会「埼玉県秩父郡荒川村白久(猪鼻)甘酒祭」(埼玉県選択無形文化財シリーズ十)一九八二年、栃原嗣雄「猪鼻の甘酒祭」(秩父の民俗―山里の祭りと暮らし)幹書房、二〇〇五年、一三二頁)
- 22 榎本千賀「猪鼻の熊野神社と日本武尊伝説」(『熊野誌』三八、一九九二年)
- 23 「神明社」(前掲「埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父」一三九〇頁)
- 24 坂本太郎他編「日本書紀(二)」岩波文庫、岩波書店、一九九四年、一〇二頁
- 25 「景行天皇 小碓命の東伐」(倉野憲司校注「古事記」岩波文庫、岩波書店、一九六三年、一四一頁)
- 26 前掲「日本書紀(二)」一〇〇頁
- 27 『秩父志』(柴田常恵・稲村坦元編「埼玉叢書 増補改訂版」第一巻、国書刊行会、一九七〇年)
- 28 「埼玉県秩父郡誌」千秋社、一九九二年
- 29 二〇〇九年、筆者による、千嶋章一氏への聞き取り調査
- 30 「八幡大神社」(前掲「埼玉県の神社 入間・北埼玉・秩父」一三九五頁)
- 31 河野敬一・平野哲也「荒川村贄川における集落機能と生業形態」(筑波大学歴史・人類学系歴史地理学研究室「歴史地理学調査報告書」五、一九九一年、三九頁)
- 32 前掲河野敬一・平野哲也「荒川村贄川における集落機能と生業形態」(『歴史地理学調査報告書』五、四五頁)

(付記)

本稿は、第三十回 日本山岳修験学会 第三十回記念高野山学術大会(二〇〇九年十一月一日於高野山大学)で、「秩父地方に展開する山岳霊場とその由緒―埼玉県秩父市贄川の猪狩神社の事例から―」と題して、口頭発表した内容に、大幅な加筆・訂正を加えたものである。なお、本稿作成にあたっては、千嶋章市氏をはじめとする古池地区の皆様、逸見房雄氏(三峰神社)・井上哲雄氏(猪鼻熊野神社)に大変お世話になった。改めてお礼申し上げます。